

事例研究：人的リソースの利用状況 - 中国帰国生徒の場合 -

寺村 由佳
佐久間 治夫

目次

1. 調査の目的
2. 調査の概要
 - 2 - 1 調査の対象
 - 2 - 2 調査の方法
 - 2 - 3 データ分析の方法
3. 結果と考察
 - 3 - 1 事例A
 - 3 - 2 事例B
 - 3 - 3 事例C
 - 3 - 4 事例D
4. 今後の課題

1. 調査の目的

日本の学校に編入された中国帰国生徒は、第二言語としての日本語の習得、日本文化特有のコミュニケーションパターンの習得、学校文化の習得、第二言語を使用しての学力向上、アイデンティティ等の課題を抱えながら学校生活を送っている。彼らは学校という設定された学習環境、あるいは学校以外のさまざまな学習環境と効果的に関わることをとおして、これらの課題を少しずつ解決することができ、学校適応が促進されることが望ましい。

田中（1992）によれば、日本語学習者の学習環境を構成する要素としては「人的リソース」、「物的リソース」、「社会的リソース」の3つのリソース（資源）に分類される。人的リソースとは人との接触であり、物的リソースとは、本や学習設備や通信教育等をさし、社会的リソースとは学校や学習グループ等をさしている。小林（1993）は第二言語としての日本語教育のめざす教育システムは、学習者の参入するコミュニティの成員が学習者と

の相互作用をとおして同時に好ましいリソースに成長していけるような機構でなければならないとして、機構の構築のためには、これら3つのリソースのなかで第一に重要性を持つのは人的リソースであると述べている。

以上の考えを受けて、本稿では人的リソースの観点から帰国生徒の学校編入後の実態を考察したい。生徒自身を取り巻く環境のなかでどのような人とつながりを持っているのか、その人的リソースは彼らにとってどのような援助機能を持つのかの2点について、事例を用いた考察を試みる。

2. 調査の概要

2-1 調査の対象

調査対象者は中国帰国者定着促進センター（以下センター）中学生クラス退所者で以下2つの条件にあてはまる者とした。

1. センター退所後、中学校に編入された者。
2. 退所後3年程度経過した者。
3. 女子であること。

条件の2については、人的リソースの考察のためには時間の経過が必要であること、また、退所時以降の記憶が明確であることが望ましいという理由から、退所後3年程度の者とした。条件の3について女子という条件をつけたのは、インタビューが女性であることから、同性者間の方が調査対象者が話をしやすいと予測したことによる。その結果以下の4名を対象者として調査を依頼した。

- 事例A センター退所時 18 歳中3に編入 調査時 20 歳高3 退所後3年5か月
事例B センター退所時 16 歳中3に編入 調査時 19 歳高2 退所後3年1か月
事例C センター退所時 15 歳中3に編入 調査時 18 歳高3 退所後3年5か月
事例D センター退所時 17 歳中3に編入 調査時 19 歳高3 退所後3年1か月

対象者は全員、中学校卒業後中国帰国生徒のための特別定員枠で公立高校に進学しているが、調査時に事例Cのみは2年生を留年していた。

2 - 2 調査の方法

1) 調査の形態：半構成的面接法による訪問調査

あらかじめ調査対象者には調査の目的を伝え同意を得た後、対象者の自宅近くの喫茶店で行った。対象者はセンター退所生であり、調査者との関係にはある程度の信頼感が存在する事実から、音声テープでの会話録音の許可を得て、基礎データとした。

調査者は対象者にセンター退所後から現在までに「何が起ったのかを教えてもらう、気持ちを語ってもらう」ことを心構えとしてインタビューを行った。調査者は調査目的の人的リソースに応じた質問を準備するが、質問項目は紋切り型ではなく調査対象者の発言に沿うようなかたちで臨機応変に展開することも心がけた。

2) 質問のカテゴリー：学習、心理、情報、遊びの4つを設定した。

「学習」の内容は、日本語と学科について学習を助けてくれる人の存在についてである。日本語や学科でわからない点を誰に聞くのか、日本語の学習の機会として日本人の友人を認知しているかということ等をさす。

「心理」の内容は、異性関係の悩み、日中の文化を持つゆえのアイデンティティの葛藤、同級生間や家族間等の対人関係の悩み、進路の相談等、情緒面に関して、どんな人と接触して解決しているのかということ等をさす。

「情報」の内容は、学校生活に関すること（進学情報、学習活動情報等）や学校外の生活（アルバイト情報、時事情報等）で具体的な情報を誰から入手するのかということである。

「遊び」とは趣味や休日の過ごし方について誰とどんな行動をするかということである。

質問のカテゴリーを考えるにあたっては以下のソーシャル・サポートと高校生への進路指導のガイダンスについての枠組を参考にした。人的リソースの利用を発展的にとらえれば、ソーシャル・ネットワークの形成につながることで、日本人高校生対象の学校適応モデルは中国帰国生徒の目指す学校適応に重複する側面があること、以上の2点の理由による。

周(1993)は外国人留学生が受けるサポートの領域として、先行研究を4つの領域に分けている。第1に研究領域について(授業、発表、試験、勉強、研究等)、第2に人間関係領域について(人との付き合い、自分の意見

や態度の伝達、人とのコミュニケーション)、第3に情緒領域について(怒り、悲しみ、悩み、いらいらといった不快な感情)、第4に環境・文化領域(日常生活、生活費、食べ物、言語、文化、風俗習慣、価値観等)。武南高等学校ガイダンスセンター(1994)は学校生活への適応のモデルのなかでどんな生徒でも一時的に遭遇する3つの問題として、教科学習、友人関係づくり、進路探索をあげている。

3) 質問の仕方: 順次、4つのカテゴリーについて中学校編入時から調査時まで時系列に話が進むように質問を行った。話題にのぼった人については、その人に接触する頻度とどのくらいの親密さであるかも尋ねた。

4) 調査者: 教務課講師1名または2名

事例A Bは調査者2人で、事例C Dは調査者1人で行った。

5) 使用言語: 日本語

6) 調査時期: 1994年7月及び8月

7) 調査所要時間: 1時間程度

対象者の集中力の持続や時間的な負担を考慮し、1時間程度と目安を決めた。

2 - 3 データ分析の方法

記録として残した音声テープを文字化し、各カテゴリーについて、調査対象者と関わっている人を抜き出した後、表に転記した。表の縦にはカテゴリー項目、横には時間の経過を表した。関わりの頻度は線の太さで表し、一番太いものから、ほぼ毎日、1週間に2~3回程度、1週間に1回程度、1か月に1回程度、1年間に数回程度の5段階で示した。人的リソースの利用が、主に対象者自身からの働きかけによる場合には実線で、主に相手からの働きかけによる場合は点線で表した。また、インタビュー中に話の中に登場はするものの、あまり接触のない人物については矢印をつけて区別した。接触方法は電話、手紙、会うことの3種類いずれについても、1度の接触を1回と数えた。性別の判明する者は記号で表した。

3. 結果と考察

各事例について、カテゴリーごとの結果とインタビューの内容から調査者が感じたり、思ったりしたことも加え全体的な考察を記す。

3 - 1 事例Aについて(表1)

センター退所時18歳 中3に編入 調査時20歳 高校3年 退所後3年5か月

1) 学習について

市役所から派遣された日本語教師、中学高校の教師、中学の同級生を学習のリソースとして利用している。特に、市役所から派遣された日本語教師を中学校編入時から調査時点の高校3年まで長期間、リソースとして利用している。この日本語教師は中国人で、中学では週に2日、日本語を主にみてもらい、高校に進学してからは週に1日、学科を中心に教えてもらっている。相手から(行政から)働きかけているリソースではあるが、高校受験時は、Aさん自身が入試対策として、自分で題名を決め作文を書き、日本語教師に添削してもらう方法で積極的に学習した。高校に進んでからは学科の内容でわからないところを、自分から質問する形で教えてもらっている。

中学では日本語教師と並行して、校長と教頭から個別に教えてもらう機会を持つ。校長室で日本語、数学、国語の個別指導を受けた。Aさんは中学校の先生はとってもいい先生であったと語る。

2) 心理について

Aさんは悩みごとはあまりないと語る。しかし不安なことがあると市役所の日本語教師に話す。家族のことなど対人関係の悩みを話す相手は中学3年時の日本人同級生である。

3) 遊びについて

中学高校ともに日本人同級生と遊んでいる。中学に編入後、一か月くらいしてから、同級生の発案でどこかに遊びに行くことになる。6人程度で外食やカラオケに行き、カラオケは歌えなくても聞いていた。中学生の頃、日曜日の夕方は、いつもの日本人同級生5~6人が家へ誘いに来る。近くの駅のスーパーの中の本屋で漫画を見る等する。この遊び友達は受験の前には一緒

に受験勉強もした。進んだ高校は別々だが、電話、手紙で連絡を取り長期にわたって接触している。高校進学後は2人の同級生と1年から同じクラスで仲が良く漫画の貸し借りをしている。

4) 情報について

高校進学時には市役所派遣の日本語教師から、大学進学についてはバイト先の日本人大学生から情報を得ている。得た情報から大学の下見もした。高校進学時に志望校を決める際に、クラス担任との三者面談で志望校が決められず、市役所派遣の日本語教師に頼んで資料をもらい、自分で受験科目等を調べ志望校を決めた。

バイト先は市役所の日本語教師に紹介してもらった。

5) 考察

Aさんの人的リソースの活用をみると、市役所派遣の日本語教師や同級生たち、アルバイト先友人と長期に接触をもっていることが特徴的である。日本語教師は学習、心理、情報の3つでリソースになっている。編入直後の日本語能力があまり高くない時期に、自分から同級生に働きかけて、わからないことを聞く、一緒に遊ぶなどの行為にはかなりの積極性が要求される。「編入直後はしばらくは同級生の話す日本語を聞いて日本語の使い方を観察していた。」「日本人同級生と一緒にいると、すべて日本語で話すことから日本語の勉強になると思う。」の発言から、Aさんは同級生やアルバイト仲間との接触を楽しみながらも、日本語学習も目的の1つとして考えていることがうかがえた。

項目	センター	中3	高1	高2	高3
年月	91年2月	91年6月	92年4月	93年4月	94年4月
生活A			♀市職員		
生活B				母友人	帰国者青年
生活C		♀隣人おばあさん ♀保証人の奥さん (キリスト教)	死亡		
		キリスト教信者達		♂隣人おじいさん	
生活D		伯母 (身元引受人)			
進学A		校長 ♀市職員	♀バイト先友人		下兄
進学B					担任
進学C		♀中3担任			
進学D		中3担任			♀の帰国者先輩....
学校生活A		♂中3担任 ♀中3同級生 バレー部員			
学校生活B				高2担任 ♀野球部マネージャー	
学校生活C		♀中3担任 ♀同じ団地の 同級生 美術部員	♂高1担任 ♀帰国者同級生 (6人) ♀同級生1人 美術部員	♂高2担任	
学校生活D		♂25期修了生 (同級生) ♀同級生6~8人	帰国者同級生 (複数人) 天文部員		

3 - 2 事例Bについて（表2）

センター退所時16歳 中3に編入 調査時19歳 高校2年 退所後3年1か月

1) 学習について

高校での取り出し授業の他に、学習のリソースとしては主にボランティア学習グループを活用している。この学習グループでは日本人大学生が中心となり教えている。中学の時は日本語、高校になってからは学科の補修が中心。知人を通じて自分から参加した。中学校では編入時に学力の補充のために、

各教科ごとに教師がついて、毎日放課後、5教科を勉強した。

2) 心理について

中学編入直後からいじめられた。センター修了生に電話でつらいことを話した。Bさんは彼女がいたから中学校をやめずに通えたと語る。Bさんにとって一番いい友人。高校2年からの仲良しの日本人同級生にも何でも話す。この同級生が中国語に興味を持っていることがきっかけで仲良くなった。

3) 遊びについて

高校2年から有職の帰国者青年や日本人青年と週に2～3日遊んだ。学校より仕事をした方がいいと友達は言う。車で学校まで誘いに来る。遊びはドライブが多い。遊んだことと中国旅行で出席日数が足りず留年してしまったため、今年度からは遊ぶ回数を減らした。

4) 情報について

アルバイトを探す等の日常生活に関することは、帰国者仲間や母の友人を利用している。高校2年から野球部のマネージャーを始めた。もう1人のマネージャーに学校生活でわからないことを聞く。

高校2年の10月に中国へ帰った時は担任教師が心配して、自宅に電話してきた。帰国後、退学を考えたが担任教師の説得もあり思いとどまった。

5) 考察

Bさんの人的リソース利用は高校2年生から活発になっている。高校1年生半ばまではセンター修了生が電話でのよき相談相手として存在するくらいである。相談相手の修了生も当時Bさんと同時期に中学校に編入されているのだが、10月頃には中学校をやめている。Bさんの事例は、いじめの対象

になってしまうこと、日本語で意思の疎通が難しいこと等、編入直後は帰国生徒にとって抱える問題の多い時期だということを示している。

項目	センター	中3	高1	高2	高2(留年)
年月	91年6月	91年10月	92年4月	93年4月	94年4月
【学 習】 日語		帰国者の会 			
学科		各教科担当 	帰国者の会 		
【心 理】 対人関係 アテンティブ 思春期	♀34期 修了生			♀同級生 	
【遊 び】				♀♂帰国者& 日本青年  ♀日中同級生 	
【情 報】 日常生活				♀母友人	♀帰国者青年
進学					担任
学校生活				高2担任  ♀野球部マネージャー 	
【その他】			♀帰国者 同級生達 		
【備 考】 家族状況					
できごと		いじめ、悪口 (12月やめたい)		野球部 バイト 不登校週2回	バイト
中国				10月中国へ ♂婚約者? 	

自分から働きかけ…赤線  年数回  月1回  週1回  週2～3回  毎日
相手から働きかけ…紫線  年数回  月1回  週1回  週2～3回  毎日

3 - 3 事例Cについて（表3）

センター退所時15歳 中3に編入 調査時18歳 高校3年 退所後3年5か月

1) 学習について

中学編入直後、中国語を学んでいる学校事務員が個別指導を申し出てくれた。2回行ったところでCさんから断った。担任教師は体育が専門であり、中国ではほとんど泳いだ経験を持たないCさんに水泳を教えてくれた。高校では1年の時、日本語の取り出し授業を受けた。

2) 心理について

編入直後から通学したくないと感じることがあったCさんの第一の相談相手は母親である。高校2年に兄弟が呼び寄せで中国から来日してからは、姉にも悩み事を相談する。高校には中国帰国生徒が学年10人在籍しており、その中の一人とは心理面での話もできる。

3) 遊びについて

心のことを話せる帰国者同級生を家に呼ぶ程度で、カラオケやボーリング等で外出することはない。衣服等の買い物も母が行っている。

4) 情報について

生活に関する情報は、同じ団地に住む人とキリスト教関係者からのもので占められている。センターを退所し、引っ越してきた直後から、隣の部屋のおばあさんが日常生活に関することすべてを世話してくれた。毎日、ゴミの出し方や買い物等を教えてくれた。高校2年の時に亡くなるまで続いた。その後、同じ団地に住むおじいさんと話をするようになり、おじいさんの知り合いの飲食店でアルバイトをしたこともある。学校生活に関してわからないことで尋ねることのできる日本人同級生は1人いる。しかし、情報交換は主に帰国者同級生としている。

項目	センター	中3	高1	高2	高3
年月	81年2月	81年6月	82年4月	83年4月	84年4月
【学 習】					
日語		事務員			
学科		♀担任(体育)			
【心 理】					
対人関係	♀33期 修了生			♀姉	
アインシュタイン 母					
思春期			♀25期修了生 (同級生)		
【遊 び】			♀25期修了生 (同級生)		
【情 報】					
生活		♀隣人おばあさん	(死亡)		
		♀保証人の奥さん (キリスト教)			
		キリスト教信者達		♂隣人おじいさん	
学校生活		♀中3担任	♂高1担任	♂高2担任	
		♀同じ団地の 同級生	♀帰国者同級生 (6人)		
		美術部員	♀同級生1人		
			美術部員		
【その他】		♂24期修了生			
【備 考】					
家族状況				兄・姉 呼び寄せ	
できごと		美術部 月2回くらい 不登校	美術部 不登校ときたま	バイト	
中国	姉に手紙				夏に中国旅行

自分から働きかけ…赤線 年数回 月1回 週1回 週2~3回 毎日
 相手から働きかけ…紫線 年数回 月1回 週1回 週2~3回 毎日

5) 考察

Cさんの関わる人は帰国同級生と隣人が主である。親しい日本人同級生はいない。美術部に入ってもみたが、日本人の親しい友人はできなかった。美

術部は個人活動が多いことも原因かもしれない。同じクラスに帰国者がいなかった1年の時は日本語を話したが、2年からは学校でも家でも中国語を使うので、日本語が下手だと言う。実際にはCさんの話す日本語は文型や表現が豊かで、日本人との意思疎通に支障がないほどに上達しているのだが、インタビュー中にも文法が間違っていないか、発音が通じるかどうかを何度も気にした。日本語にも学力にも問題がなく、高校でクラス単位でみると、適応していると見受けられるだろう。しかし、内面の不安はとても大きく、将来日本に住みたくないともらず、Cさんの不安は何に起因するのだろうか。

3 - 4 事例Dについて(表4)

センター退所時17歳 中3に編入 調査時19歳 高校3年 退所後3年1か月

1) 学習について

中学では日本語教師が週に2回学校に派遣された。担任教師が学科を個別で教えてくれた。高校に進学してからは、1年の時、国語と社会の取り出し授業があった。

2) 心理について

高校に入ってから、2学年上の帰国者の先輩とよく接触した。女性の先輩と、帰国者同級生がDさんの相談相手になっている。2年生の夏、洋上セミナーに参加したことがきっかけで、日本人高校生の親友を得た。

3) 遊びについて

心理的なことを話せる人的リソースは遊びでも重なっている。中学校3年生の時の日本人同級生とは家を訪問しあう。帰国者先輩とはカラオケやボーリング等、外で遊ぶ。洋上セミナーの友人とは軽食を食べる。今も電話をしたり会ったりする。

4) 情報について

進学情報については、帰国者先輩をリソースに利用している。学校生活でわからないことは中学時代は同級生と隣に住む帰国者の男子が助けてくれたので、戸惑ったことはなかった。高校に進学後は帰国者同級生に聞く。

項目	センター	中3	高1	高2	高3
年月	91年6月	91年10月	92年4月	93年4月	94年4月
【学 習】					
日語		日本語講師			
学科		中3担任			
【心 理】					
対人関係 アイデンティティ 思春期			♀帰国者先輩 ♀32期修了生 (同級生)	♀洋上セミナー の親友	
【遊 び】		♀中3同級生 6～8人	♀♂帰国者先輩 5人	♀洋上セミナー の友人2人	
【情 報】					
日常生活		伯母 (身元引受人)			
進学		中3担任			♀♂帰国者先輩
学校生活		♂25期修了生 (同級生) ♀同級生6～8人	帰国者同級生 (複数人) 天文部員		
【その他】					
【備 考】					
家族状況					
できごと		2～3回不登校	天文部(半年)	洋上セミナーに参加(中国へ) バイト	
中国	ホームステイ				夏に中国旅行

自分から働きかけ…赤線 年数回 月1回 週1回 週2～3回 毎日
相手から働きかけ…紫線 年数回 月1回 週1回 週2～3回 毎日

5) 考察

帰国者仲間にも日本人にも親密性の高いリソースを持っている。情報も豊

富で日本人と帰国者の両方の輪に入っている印象を受けた。高校で帰国者先輩と知り合ったこと、洋上セミナーに参加したことによって興味が近い日本人の友人をもてたことが、彼女の人的リソースの利用を深くしている。

4. 今後の課題

4事例4様に人的リソースの活用をし、懸命に学校生活を送っている。センター在学中は協調性がなく、適応が心配された者が多様な人的リソースを持ち、将来の夢を語る。一方では、明るい性格で友達もたくさんできらうと予想された者が、予想と反して、限られた範囲で活動し、将来に対しても大きな不安を持つ。そこには、社会的リソースの提供の有無、本人の性格、中国で身につけた対人行動様式、所属した学校の環境や文化等の要因が絡んでいると思われる。本稿では人的リソースの利用状況を記述した。人的リソースの活発な活用は教科学習、日本語学習、友人関係づくり、進路探索、有形無形の高校生文化の無意図的学習に影響する実感を得た。今後、人的リソース研究の課題としては、より多くの事例を収集することのほかに、人的リソース活用による、学校・学生生活適応の効果を測定する方法を研究すること、及び、教育現場において人的リソースの活用と形成について、どのような積極的方策がとり得るかについての実践的研究が欠かせない。

参考文献

- 田中 望 1992 リソース型教材とはなにか 日本語教育研究所研究発表
会（日本語教育におけるリソース型教材）資料
- 小林悦夫 1993 第2言語としての日本語教育の課題 中国帰国孤児定着
促進センター紀要 第1号 1 - 32 .
- 周 玉慧 1993 在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み
社会心理学研究 第8巻第3号 235 ~ 245 .
- 武南高等学校ガイダンスセンター 1994 LHR MANUAL